念の脈絡があり、中国の古典的な文章の表現は、常にこの線に沿った形で行なわれていたと考えられるからである。

かくして、このような医学思想の表現としての、この〈医は意なり〉という一句が、更に新旧両『唐書』の「許胤宗伝」や『金匱玉函経』・『備急千金要方』等の諸文献において見出されるのである。

ところで、戦国時代の程本という人物に仮託される『子華子』の中にも、以上と同様の内容を伝えると目される記述が見出される。

そこでは、〈医は理なり。理は意なり〉という表現になっているが、この一文が、いわゆる〈医は意なり〉の医学思想と全く同一の脈絡中にあることは、既に明白であろう。『子華子』の成書年代には問題もあり、かつこの一句自体も、先秦時代の他の書物のいずれにも見出せないものではあるが、ちょうど『易経』の「繫辞上伝」が編纂されつつあった頃、その言語観を敷衍するところの、この一文が書かれたであろうという可能性は、十分指摘するに足ることであると思われるのである。

いずれにせよ、このいわゆる〈医は意なり〉という一句は、古く中国古代思想に濫觴を浮かべる医学思想を表象するものであったと考えられるのである。

ところでまた、更に我が国江戸時代の吉益東洞も、この〈医は意なり〉の一句について、かなりの言説を残している。この一句は、日本においても、早に『医心方』において引用され、相当の注目を集めていたことが窺われるのであるが、その日本における受容の実際を見ると、日本の医家たちに独特の考え方なども見受けられ、これまた興味深いものがあると思われるのであるが、その論究は割愛したい。

（平成十年十一月例会）

❋❋❋ 紹　介 ❋❋❋

大星光史著『文学にみる日本の医薬史』

著書、大星光史氏は富山医薬大における小生の同僚であり、かつ俳句の師匠である。大星氏は東北大学文学部国文科のご卒業で、本学で日本文学を講じておられる。

これまでに、『漂泊俳人の系譜』『愛しき歌びとたち』『日本文学と中国老荘思想の研究』などの著作があるが、このたび医療思想を文学作品の中に探り出す研究の成果を『文学にみる日本の医薬史』として上梓した。

本書は、文学者と医学者集団が共存する世界に著者が身を置いた特殊な状況から生み出されたもので、今更ながら学際領域の大切さを実感させられる。

その内容は、日本書紀、古事記の世界から始まり、万葉集、源氏物語、日本霊異記、今昔物語、徒然草に到り、更に中世から江戸の文学作品、あるいは作家その人の健康記録等を網

羅したもので、これまで類書をみない一大研究成果である。

この著作によって、我々の祖先達が病気というものをどう考え、どのように対処してきたか、その流れと様々な思潮が理解できる。

また、様々な病態や症状が現代医学的にどのように理解できるかを、本学の臨床各科の専門家達の助言を得て考察している点も本書の特色となっており、とりわけ、松尾芭蕉終焉の記録は従来の学説を覆す新見解である。

本書を学術論文の形式にまとめあげたものが本学会誌に受理されたが、本論文に対し、医学博士の学位が富山医科薬科大学より授与されることになった。まさに歴史的な慶事である。

二十一世紀を目前にして、医療の本質が問われている今日、本書から我々が学ぶべきものは多い。歴史を学ばないものには未来は語れないとの感を強く持たせられた労作である。

（寺澤　捷年）

〔雄渾社：京都市左京区田中門前町八七、電話〇七五―七二二―五一五一、平成九年十月、A5版、五四九頁、本体五八〇〇円〕

左記のように著者からの訂正の申出でがありましたのでお知らせいたします。

日本医史学雑誌第四十四巻三号所載「医科大学国家医学講習科記録」三三五頁、写真一、二、三は誤りに付、削除します。同頁本文第七行も削除します。この写真は石崎鼎吾履歴（三二二頁）のうち函館医学校時代（明治五年―七年）のものでした。

この記録は日本医史学雑誌第四十巻二号（平成六年六月）「函館医学校記録」一五五―一八四頁に発表しました。なお写真三枚は、後日発見されました。

（石崎　達）

第四三巻におけるノンブルの誤植について編集委員会からのお詫び

さきに発行されました『日本医史学雑誌』第四三巻（一九九七年）にきわめて憂慮すべき誤植の存在することが発見されました。すなわち同巻第二号三三一ページの次のページが、あやまって「二三二ページ」とノンブルされました。この誤りに気づかず、これ以降の各ページも逐次ノンブルされましたので、この四三巻は一〇〇ページすくないページ数でおわる結果になったわけです。

ノンブルが重複しているという事実は、学術雑誌が使命といたします文献引用の際におおいに混乱をきたすことは必定であります。このような重大な誤植が生じましたことについて、編集委員会は会員の皆様に深くお詫びを申しあげるものであります。さらに重複した二三二ページから三三一ページの間に掲載されております論文の著者の方がたには、更なるお詫びを申しあげる次第です。

（編集委員長　深瀬　泰旦）